

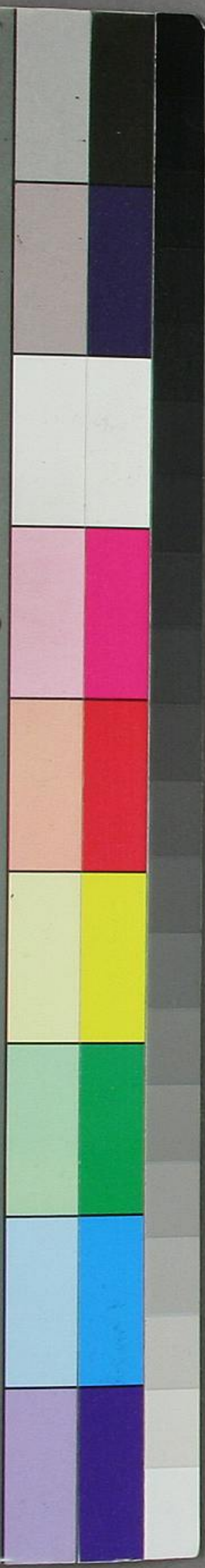
太 郎 兵 衛 水 掛 論

種 蒔 權 兵 衛 の

後 継

服 部 應 賀 著

定 價 三 匁



官許明治七年十一月八日



# 太郎兵衛水掛論

服部應賀著

種蒔權兵衛の長男。太郎兵衛るる者ハ迂遠の  
 学文を好む唯家業の道と主とすは高王の  
 四百余州ハ奔走して八年旅寓あり我家の  
 門前を三度通行せしむ寸陰を惜みて一度も家へ  
 立りしに海川沼溝田畑の水利を通ぜし仁意を  
 追ひて。用水悪水の便利を閑き下田を上田ハ為

の委まかしきの所謂いふ智者ちよめの水みづを以もつてたの一いむの意いふ  
ようや父ちちの種ま蒔まのな名な小こ高たかく子このな為な事こと成な業わざ小こ皆みな  
水みづ楯たてのな名なを採とハ農いん家かといいへども又また一い奇き之のされば過す  
年とし家か僕わらわ小こ小こ作さくを命めいトく驛えき路ぢ小こ家か作さくと建たりけるが  
間まもあく其その家か作さく類るい焼やせしもへ太た郎らう兵へい工こう父ちち小こ又また家か  
作さくを促うながしけるが父ちちの疾しやく小こ家か作さく料りょう渡わたせば再また々々  
せばと云い。太た郎らう兵へい工こう云い其その家か作さく料りょう渠かが身み小こ付つるが  
有あるれども焼や失しるが是こゝ無なるがとの論ろん判はん數すう日にち  
小こ及および近ま隣りんの者もの此こ論ろんを聞きく權けん兵へい工こう太た郎らう兵へい工こうの

水みづ楯たて論ろんと云いふも宜あたりきききども太た郎らう兵へい工こう父ちち小こ迫せまりて  
りし。原はら無なのかへ父ちち有あるが家か作さくをして無なとりれば原はら  
の無なありと理り解かいして家か作さくをえの如ごとく營えいせけるが  
日ひを重おもく此こ隣りんの酒しゆ食じき屋やより培こ糞やしの臭にお小こ万まん客かく追お々々  
減へるが家か業わざの妨さまたげられば夫それを除のぞくの使つかをよこすは是こゝ  
小こ驚おどろき太た郎らう兵へい工こう方かたへ来きて云い々々をりしし太た郎らう兵へい工こう一いつ  
筆ひつを志したらめて是こゝを以もつて答こたへと渡わたせば。是こゝハいう  
るが答こたと聞きがゆへ夫それハ隣りんの弦げん歌か夜よ々々喧けんくして  
寢ねまらぬ。夫それも農いん業わざの妨さまたげられば家か業わざ同どう断だんの妨さまたげらぬ

定二天作たか不ふ算さん當とうあるべしとの答こたへといへば。小  
作せう男おとこよろあびいさんで隣りんへ送りし其その後のち何なにの  
沙汰さたもあし是こゝを聞き者もの又また太郎兵工たうらうへいこうの水みづ拭ぬぐ論ろんと  
りの都みやこで近ちか邊へ不ふ口くち論ろんといふもも太たう郎らう兵へい工こう不ふ裁さい  
判はんをささままももバ其その坐ま不ふ論ろんの非ひをを表あらわするがが何なに非ひを  
火ひ不ふかへて火かを消けい水みづををかかけるの上の上まりけききバ太たう郎らう  
兵工へいこう水みづ拭ぬぐ論ろんの名な弥や高たかし既い不ふ今いま日ひ父ちちより先まへ山  
田やまへ行いて水みづ車ぐるまの用もちをを涉わたせ父ちちの来きたるる遅おそきき我われ  
但ただしけしききバ古こ院いんの学がく社しゃ不ふ居ゐるときき水みづ車ぐるまをを擔かぐぐ

戻もどりもどりもどろろ学がく社しゃ不ふいいととももバ群ぐん集しゆの者もの大だい殿てん不ふあ  
ふふをを父ちちと村むら長ぢやうとの舌かたむち争まじ志しををくくるるももバ人ひとううげ  
不ふ忍しのむむ伺うかがひひけるる不ふ一いつ個この歌うた舞まひ者もの上うへ坐まへまりみん  
時とき勢せい断た然ぜんの言ことばをを発はししるるももバよりより續つぐぐ上うへ金かねををるる者もの  
ああれれバ是こゝをを納いれれららもも猶なほ我われ父ちち教しよ訓くんををるるいいろろめめききらら  
るると見みて太たう郎らう兵工へいこう忍しのむむねねへ群ぐん躰たいの稻い庭ぢやうをを搔かきき  
けけつつ上うへ坐まふふいいたりり村むら長ぢやう不ふ一いつ礼らいしし父ちち不ふ云いひひりり  
唯ただ今いま歌うた舞まひ某たれが芳よし言ことばををいいかかが聞きれれしし又また賤せん業ごうの  
中なかより人ひとの性せい善ぜんををああららわわしし時とき況げ不ふ麻あ非ひもも是こゝ

塵埃の玉泥中の蓮ともいふべしかゝる貴人  
にこそ知て老躰の古習を弁論をうとあられ  
今此大殿を見よとせば耆嫗童男婦女多けしは  
荊棘淫肆の譬の馬耳風なる吾不肖といへども其  
人に見ん教を解の志あまは偏小吾を以て名代  
たらしめ早く新田におもむきて人夫小耕耘  
の差配あれ疾水路の海せたりといふより村長  
も其儀然るべしといへば權兵衛一統へ會談し  
て立去けしは有志の者の渠が徳實を敬ひて

坐を聞き少女達の太郎兵衛の泥足を見て衣服  
いゝか身とひらけは其閑く道の一筋かれども  
其志の二ありさて太郎兵衛の父を見送りて  
其かへるさ大殿に張出し諸人の名前を見  
け貧民と藝者娼妓の名札を残りば「は」とり村  
長の前へ差出して云や「我此者等が上金を弁納  
せしがゆへ彼等ハ信志の衣褒られて金貨のそとく  
戻しゆ」と述ぶが村長名札をかぞへて「是ハ貧民  
と藝者娼妓の名のこあらが譬へ貧民といふども其



吾國律に繫縛の

索あるを切の

るは夫を

自身の自由と

誇化人何とば

古聖の

縛を解て

其索と

渠と縛を

者わは是を

双明の天吏と

いん

悟時者



古の聖人も

よく天理を

自得とせよ

身を学文に縛せらば

近年の鈍学者と

自國産の自力と

たのむべきは何事由

外國の風とせよ

心うら出る信を疾きかへつて不仁のいなり既小印  
 度ふての貧女施物とまらぬのちけむが髪を鬻んで信  
 施とまらば否吾ふかあるは是を納む其由はそも鰥寡  
 孤獨の身とありせば才一も妻ふこくもて便なく世と  
 ころ業もるき中ふ子と育むを鰥といふ。才二夫ふとある  
 子といふは鰥のたぬを寡とぞいふ。才三世小拙ある  
 早く父母ふこくも身のおき処るさ男を孤といふ。才四  
 年老て業もあらぬ養ふ子もあらく露命ふせまら  
 者て獨といふ。世ふ憐るる者此上ふはけむとも時義

賊  
 理ニア  
 財ヲ云

ふよのての苦も苦をかさねるともあらん叔藝者旋  
 女も皆貧民より出る者もむべたらん官の許印を  
 持むとん是正業ふあらざるものを神佛祭事小促  
 されん貧苦の中の出金を笑ふん出た者もあり又祐  
 福の且那或ハ客より出小ゆせよ清くぬ賊の如きハ  
 修身沙家の基礎とまら此学社小我ハ納む。雅君印  
 度の貧女とささるが印度ふまら長者の施金不浄に  
 して精舎の焼亡一例あり其一を志つて其二を志つて  
 物の名さへ悪ハ厭ふがゆへ聖ハ勝母の名を聞く其里

へち入ぬとある。我國近年府中の名不忠の音の通  
むる小や是を静岡とあつらめらる。例もありと理を  
述<sup>つ</sup>て迫<sup>せま</sup>りけむ。バ村長低頭して一深志恐感のいさうい  
で命<sup>いのち</sup>を肖<sup>なま</sup>へる。さあれが童へ教訓とと促<sup>うなが</sup>しけむ。太  
郎兵工庭前の蓮池へ持参の水車を仕<sup>し</sup>りけむ。童と  
ちと残らば招<sup>まね</sup>び此車を互<sup>あひ</sup>ふ踏<sup>ふ</sup>へ水中の魚を獲<sup>と</sup>よ  
とりんが急<sup>いそ</sup>がりか。こーとみあく夫<sup>お</sup>かろと見え  
太郎兵工上坐の村長小對坐<sup>あひま</sup>し。夫書と見え。圖を見  
ざれば其人を見ん。其声を聞<sup>き</sup>ざらば如く存<sup>ぞん</sup>む。これ

我業を圖<sup>と</sup>小表<sup>ひ</sup>して教へと。併農家の子小他学<sup>よがく</sup>ハ  
注意あり。若博く学<sup>まな</sup>び得<sup>え</sup>ば。綴<sup>つづ</sup>れをまとい泥<sup>どろ</sup>膠<sup>こう</sup>  
小<sup>こ</sup>のからん。て都會<sup>と</sup>へ走<sup>は</sup>るべし。是をいなん。がため小  
童<sup>わらわ</sup>をさけぬと云<sup>い</sup>つ。又行<sup>い</sup>て見<sup>み</sup>る小案<sup>あん</sup>の如く池<sup>いけ</sup>の  
水<sup>みづ</sup>を丁<sup>てい</sup>がれが童<sup>わらわ</sup>を残<sup>のこ</sup>らば。其父母等<sup>ちちおやら</sup>が。かゝる大殿<sup>だいぜん</sup>小<sup>こ</sup>よ  
びあめりて形<sup>かたち</sup>をた<sup>た</sup>い。コヤ能<sup>よ</sup>聞<sup>き</sup>べし。今踏<sup>ふ</sup>し。り車<sup>くるま</sup>  
ほかの。こちの身<sup>み</sup>小<sup>こ</sup>壁<sup>かべ</sup>ふ。之池<sup>いけ</sup>の魚<sup>うしほ</sup>ハ学<sup>まな</sup>文<sup>ぶん</sup>のたへる  
り水<sup>みづ</sup>を丁<sup>てい</sup>の修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>のたへるあり。されば修<sup>しゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>を積<sup>た</sup>ぎ  
まハ学<sup>まな</sup>文<sup>ぶん</sup>の魚<sup>うしほ</sup>ハとらむぬ。のを皆<sup>みな</sup>車<sup>くるま</sup>をふむ。のこ志<sup>こころ</sup>つて



水のあとへ戻つて老るぬのハ修行不怠あるが如し吾  
さいぜん元へ水の戻つ仕掛をいせし主とちの母人哉  
曉を語の圖解之をも父の子を誠不愛たるが由へ嚴不  
学文をさせるハ是成人のうへを思へばあり老るる不父を  
外を務るものみれば家不居正少きを志つて父の苗守  
不ハ必其子母不あまて狂惑といひ諸藝とも不たれば  
母ハ愚不して藝を休せ物を喰せ我俸させつを愛せと  
おのり人ど是ハ子子を憎が業あり或ハ父が子といま  
めんともをば母其中の垣とまりて父のまへを呵る不見

たれども打擲手不カを入ざればいよく母の三氣を吞  
みこく何事も父の前ハ母が取り去るのと思へば習ふ  
べき業ハあつれば不嘘偽の上手不なればかくれ  
忍んでまゐる悪事の終不ハ外よりあつたをさへ父も  
母も驚くといへども彼薛王の猿の如し此猿といふハ昔  
薛といふ國の天子大猿を獲て狙引不藝を仕こめと  
いれれば此猿ハ山不へ不しひきま身をもちあへば大  
食のたれどもいふ子藝ハか不へば老るる不是非とも  
不教つとらハ責殺をうり外ハか一と云々扱其悪子

母の姑おまめ娘むすめより父をばうとて母の志をくさしりしが  
 斯くりりてうらまへる母の身を苦くるむつと父よりむを  
 ゐたさしを母泣かして其理を伏うつして心を改あらため  
 直ち言う言いをたつととも其子小の志とて悪友あれは  
 改あらた心の清水永くいたむとて又泥水どろみづを流ながして学まなぶ  
 の魚いさなはとて一生悪水の中を游あそぶ者多おほくは母も子も  
 此こ圖ず解げを見合あ点てんがむらばあるとて太郎兵工が  
 水みづ掛か論ろん終つひ

太郎兵工たうらうへいこう  
 孫兵衛活計論そんべいゑきくわくけいろん 近刻ちんこく